

時空を超えた英雄

深紅の瞳

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ベル・クラネルは「フレイヤ・ファミア」との戦争遊戯のために、本拠の自室で装備の手入れをしていた。そこへ神ヘルメスがやってくる。男神から不可思議な魔導具を渡されたベルは、自分の知らない時代へと飛ばされる。その時代の名は『暗黒期』。オラリオ史上最も血が流れた時代。そこでベルが何を成し遂げるのか。それは神にも予想できない。彼は『未知の英雄』なのだから。

目次

| | | |
|-----|------------|----|
| 第1話 | 灰髪の美女 | 1 |
| 第2話 | 状況確認 | 11 |
| 第3話 | 真の邂逅 | 16 |
| 第4話 | 親子の会話 | 23 |
| 第5話 | 【福音（ゴスペル）】 | 32 |
| 第6話 | 強制戦闘 | 39 |

第1話 灰髪的美女

ベルは「ヘステイア・ファミリア」の本拠の自室にいた。

いま僕は装備の確認をしている。主な装備は、武器は『ヘステイア・ナイフ』『白幻』そして『白銀色の大剣』だ。この大剣は対「猛者」用の第一等級の武器で、名前はヴェルフがまだ決めきれていないそうだ。この武器はヘファイストス様との合作らしく、名前は格好良いのを付けたいらしい。名前はもう少し待つて欲しいとのことだ。防具は今までと同じように軽装だが、第一等級武装という点で違う。そして、ゴライアスのマフラー。今の僕なら、これを使った中距離の『間接攻撃』も問題なく使えるだろう。

なぜ、装備の点検をしているのかというと、「フレイヤ・ファミリア」との戦争遊戯を三日後に控えているからだ。

今日まで僕は「ロキ・ファミリア」の幹部の皆さんに鍛えてもらった。

訓練は、僕が「フレイヤ・ファミリア」で受けた洗礼をそのまま彼らにもしてもらい、その際の治療はアミッドさんがした。

Lv. 6 複数人による波状攻撃。皮肉にもその理不尽さに慣れていたとはいえ、フレイヤ・ファミリアから解放された日にLv. 5にランクアップした僕でもキツかった。

それでも諦めずにやり遂げた。

またLv. 5になった時に、神様にスキル『憧憬一途』の存在を覚えてもらった。その時は驚きもしたし、同時に嬉しくもなった。自分のアイズさんへの思いがスキルになつて発現していたからだ。

その事もあつて、今まで以上に『憧憬一途』の効果が向上し、戦争遊戯前に僕の実力はこうなった。

ベル・クラネル

Lv. 5

力：SSS1256

耐久：SSS1364

器用：SSS1201

敏捷：SSS1324

魔力：SSS1279

幸運：E

耐異常：F

逃走：H

超克：I

《魔法》

【ファイアボルト】

- ・速攻魔法

【ケラウノス】

- ・付与魔法
- ・雷属性

《スキル》

【憧憬一途】

- ・早熟する
- ・懸想が続く限り効果持続
- ・懸想の丈により効果向上

【英雄願望】

- ・能動的行動に対するチャージ実行権

【闘牛本能】

- ・猛牛系との戦闘時における、全能力の超高補正

【逆境超克】

- ・ 戦闘続行時、発展アビリティ『治力』の一時発現。
- ・ 戦闘続行時、発展アビリティ『精癒』の一時発現。
- ・ 戦闘続行時、発展アビリティ『魔導』の一時発現。
- ・ 戦闘続行時、発展アビリティ『魔防』の一時発現。
- ・ 補正効果はLvに依存。

このように全て能力値が1000を優に越えている。

また、魔法も発現した。というよりも、強制的に発現させたと言った方が正しいだろう。

魔導書を使ったからだ。これはフェルズさんにもらった物を使った。僕がフレイヤ・ファミリアに捕えられていた時に何もしてやれなかった御詫びらしい。断ろうと思っただが、今はとにかく力が欲しかったから、遠慮せずに使わせてもらった。

発現した魔法は付与魔法だ。なんと効果はアイズさんの魔法を越える物らしい。

確かに使うと全能力値がすごい上がって、僕もビックリしたほどだ。

これは切り札だから、使い所を間違えないようにする。

絶対に勝ってみせる。シルさんの『本当』を教えてもらうためにも。

そう想いを新たにしていると、ヘルメス様が部屋にやって来た。何でも話があるらしい。

——数十分後。

ヘルメス様から教えてもらった。僕の出生のことを。

僕を育ててくれた祖父は、名をゼウス。かつての世界最強のファミリアの主神だそう
だ。

そして僕の父親は祖父の眷族で、母親は同じくかつて世界最強だったヘラ・ファミリアの眷族らしい。

そこまでは驚きはしたけど、まだ良かった。

お爺ちゃんはやけに英雄譚に詳しくて、まるで自分が見てきたものを語るように僕に英雄譚を読んでいたからだ。むしろ、納得できた。いや、僕に死んだふりをして、オラリオに行かせたことは納得出来てないけど。

でもそれ以降の話を僕は認めたくなかった。

7年前にゼウスとヘラの眷族が一人ずつオラリオに降臨し、大殺戮を行ったこと。

ヘラの眷族は僕の母親の双子の姉、つまり肉親だということ。

オラリオに試練を与えたのは、僕が戦わなくてもすむように、というのも理由の一つらしい。

特に唯一の肉親を失ったという事実が僕に衝撃を与えた。

ヘルメス様がなぜこの話を今したのかというと、ゼウスとヘラの千年の壁を一人で乗り越えた【猛者】と戦うのなら、ゼウスとヘラの眷族の間に生まれた僕にもこの事実を伝えなければならぬと思つたから、だそうだ。後、オツタルさんと僕で一騎討ちをして、『真の最強』にどちらがなるのかを見たいとも言つていた。

今頃知つたこの重大な事実にどう向き合えば良いのか、僕には分からない。

とここで、手に持っている時計のような魔導具をふと目にする。

これは先ほどヘルメス様が僕に手渡した物だ。何なんだろう、これ？ヘルメス様は詳しく教えてくれなかつたけど。

しばらくこの魔導具を眺めていると、突然この魔導具が光り、そして砕けた。そして、光る無数の小さな粒子が僕の足元に散らばり、僕を中心に約半径1.5Mの魔法円が形成された。僕が驚いている間に、魔法円はその範囲内にいる僕と僕の装備一式をその場から消した。

まどろみに抱かれていた。

澄みきった風のような香りと、温かなお日様のような温もり。

肌を通じて感じる全ての気配が穏やかだった。

眠い。

ずっとこの居心地に抱かれていたい。

(……………?)

そつと、髪を撫でられた。額に触れた細かい指がくすぐつたい。

優しい指使いだった。安心する。

閉じている瞼をおずおずと開けた。

「……………おかあさん?」

顔も知らない、会ったこともない人の名前を唇で転がす。

瞳にぼんやりと映る輪郭の動きが、ぴたりと止まった。

「……………おかあさん、か。普通なら知らない子供にそんなことを言われれば、手刀を繰り出す衝動にかられるだろうが、お前に言われると悪くない気分になる。どうしてだろうな。お前が私の妹を彷彿とさせる髪をしているからなのか?」

「…………え？」

その人は透き通った声で僕にそう聞いてきた。

霞む目を見開く。

次第にハッキリとしてくる線の形。

最初に像を結んだのは灰色の髪で、次は綺麗に整った顔立ち。

最後は左右色の違う、いわゆるオツドアイ。

「…………」

「…………起きたようだな」

目は覚めた。

しかし、僕は、僕を見下ろしているこの人の顔にただ見入っていた。オラリオに来て美女美少女に慣れてきた僕だか、この人はオラリオで出会ってきた美女達よりも一際綺麗な人だった。

そしてもう一つ、頭の後ろが柔らかい。温かい。

何をされているのかは分かった。憧憬に何度もされてきた僕だからこそ断言出来る。

『膝枕』だ。

女の人の指が、また僕の髪をすいた。

触れられた臉が、熱い。

「……」

のろのろと上半身を起こした。

頭の後ろから遠のく温もりがすぐくもつたない気がしたけど、起きる。

一度彼女が視界から消える。代わりに僕の目に映ったのは、懐かしい部屋だった。

ここはまだ僕が駆け出しの冒険者だった頃、神様と一緒に暮らしていた廃教会の地下にある部屋だ。

そして、僕が寝ていたのはベッドの上。つまり、ベッドの上で僕の横にいる彼女に膝枕されていたということになる。

そこまで考えて僕は思い出す。

確か、ここはアポロン・ファミアリアに潰されたはずだ。

しかし、この部屋でそんなことが起きたとは思えない。まるでそんな事実は今まで無かったと思えるくらいに。

立て直したとも考えられない。今の本拠に住むようになってからも時々この廃教会は訪れていたからだ。

(どういふことだ?)

「どうした? 何かに驚いているように見えるが。……まあ良い。私から一つ質問させて。お前は何者だ?」

僕が混乱していると、目の前の美女がそう聞いてきた。

第2話 状況確認

「どうした？何かに驚いているように見えるが。……まあ良い。私から一つ質問させて。お前は何者だ？」

「……えっ？」

僕が混乱していると、目の前の美女が聞いてきた。

「何者ってどういうことですか？僕も今の状況が全く理解出来ていなくて……」

「……嘘を言つて誤魔化しているようには見えないな。私が知っていることを教えてやる。お前は突然この部屋に現れた」

「えっ？ど、どういうことなんですか？」

彼女の言っている意味が分からないので僕は聞く。

「私は自分の妹が愛したこの部屋の上にある教会に来ていた。するといきなり地下から何かの気配を感じてな。すぐにこの部屋まで来てみると、魔法円が展開マジックサークルされていた。直後、そこからお前とそこにある装備が現れた」

と、彼女は床に置かれた僕の装備一式を指差しながら告げる。

そこで、思い出す。

僕がヘルメス様にもらった魔導具によつて発生した魔法円によつて自身を包まれたことを。

「僕は本拠に居た筈……なのにここに……もしかして僕、転移したの？」

「転移？ そんな魔法は私でも知らないな」

僕の考察に目の前の女性も少し驚いている様子だ。

ところで、さつきから気になっていることがある。

「……あの、どうして瞼をずっと閉じているんですか？」

「気にするな。開けるのですら億劫なだけだ」

「面倒なだけなの！？」と内心驚いていると、彼女は「しかし、」と言って瞳を開ける。

「懐かしいと感じることができるとお前の髪を見るためならば、瞳を開けるのも悪くはないな。……ただ一つ、その紅い瞳だけは無性にくり抜きたくなる」

「ひえっ！？」

いきなり不穏な空気を醸し出した彼女に僕は怯える。

「私の愛する妹を孕ませたあの男の瞳にそっくりなのが悪い」

「……」

結構理不尽なことを言ってくる彼女を見て、このままだとヤバいと思い、僕は話を戻すことにした。

「あの、僕が転移してここに来たとしたらおかしいですよ」

「何がだ？」

「数ヶ月前に、教会ごとの部屋も『アポロン・ファミリア』に破壊されたんですよ」

「何!？」

「ヒツ!？」

僕の発言に、目の前の彼女は額に青筋を走らせた上にヤバい魔力を立ち昇らせる。

「私の妹が愛した教会を破壊だと……いや、待て……なら何故ここは無事なんだ?」

「そ、そうなんですよ!僕もそこが疑問なんです!ここが破壊された後も定期的に様子は見に来てたんですけど、改築なんてしてませんでしたし」

これ以上怒らせると不味いので、彼女の疑問に便乗して今度は『教会の破壊』という内容から話をずらす。

「私はここを一度とて破壊されたとは思えない。8年前と何も変わっていないからな。」

しかし、お前は破壊されたと言う。何かがおかしい、いや、ずれていると言った方が正しいかもな……………まさか!」

「な、何か分かったんですか?」

彼女の表情からして何かに気付いた様子だったので、僕は聞いてみた。

「お前。今、ゼウスとヘラの眷族が『黒竜』に敗れて何年経つ?」

「えっと、15年ですけど」

「……やはりか」

僕の答えにより、彼女は何か確信したようだ。

「ど、どういうことですか？」

「聞いて驚くなよ。ここは、いや、今はゼウスとヘラが『黒竜』に敗れて8年経った時代だ」

「……………えっ」

彼女が言った衝撃的な事実には僕は思考が停止した。

「しかし、15年ということはつまりお前は今から7年後の時代からやって来たということになるな」

「……は、はい」

彼女の见解に、思考停止していた僕はなんとか頷く。

「こうなつた原因に心当たりは？」

「多分、ヘルメス様かと」

僕は彼女にここに飛ばされるまでの経緯を話す。

「あの神ならば確かに納得出来るな。遺跡調査などもしているから、大方そこでその魔導具を見つけたのだろう」

と彼女は言う。

こうして僕は、自分がヘルメス様によって7年前のオラリオに飛ばされたことを自覚した。

第3話 真の邂逅

——アルファイア視点——

目の前の少年はまだ現状を受け入れきれていないみたいだ。

無理もない。私自身、さつきは未知のことで少し戸惑ってしまった。だが、今はそうでもない。すぐに既知にしたからだ。

冒険者ならば未知をすぐに既知に変えなければならぬ。

それが出来なければあっさり死ぬからだ。

冒険者をしていた頃の習慣はまだ身に付いているようだ。

少しすると、少年も何とか会話出来るようになった。

「どんな呼び方をしたら良いか分からないので名前を教えてくださいませんか？。僕の名前はベル、ベル・クラネルです」

「……………アルファイアだ」

何故か目の前の少年を「お前」と呼ぶことは憚られていたからちようど良い。

未来の人間ということは私の名前を知っているかもしれないが、その時はその時だ。

「ベルがいた時代、つまり私から考えて7年後の時代のオラリオはどうなっている？」

自己紹介も済ませた所で、私が一番気になって聞いていることを聞く。

私とザルドの洗礼を受け、オラリオがどのようなかを知りたいからだ。

こちらは洗礼に命を賭けているのだから、それがどのように未来へと繋がったのか、知りたくなって当然だ。

しかし、ベル……か。実際に呼んでみると何か不思議な感覚だ。

本当に何故だ。

何故彼と一緒に居るとこんなにも暖かい気持ちになるのだ？

そんな疑問を抱きつつ、私はベルの話聞いた。

「ひっ!?!」

ベルが怯えている。

どうやら私はイライラして、無意識にまた『魔力』を立ち昇らせていたようだ。

だが、しょうがないだろう？

色ボケの所の猪と道化の所の勇者ども、あいつら私達の洗礼を受けて以降、7年もあ
るのに一度もランクアップしてない。

これでどうやって『黒き終末』を乗り越えられる？

ゼウスわたしたちとヘラはL.V. 8やL.V. 9が居たにも関わらず、あのモンスターには手も足
も出なかったのだ。

こうなることが分かっていたならば、私は妹の子と余生を暮らしていたのに。

「あ、あのー！どうかしたんですか？」

どうやらベルを差し置いて一人で考え事をしていたようだ。悪いことをしたな。

「ああ、オラリオの冒険者に『失望』してただけだ」

「『失望』……ですか？」

ベルに思っていたことを言うが、彼はあまり分かっていないようだ。

「つまり……」

ベルに分かるようにさつき考えていたことを話す。

「L.V. 8や9が居たのに、勝てなかったんですか？」

「ああ、完敗だ。アレには何も通用しなかった。だからこそ、彼等を越える『英雄』が必
要なんだ。にもかかわらず、L.V. 6, 7程度で留まっているなんて何を考えているん
だ、あいつらは」

ベルの疑問に答え、私の考えを言う。

「L v. 6やL v. 7も十分凄いなと思うんですけど……。じゃあ、「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」でも『黒竜』を倒せないんですか？」

「ああ、今のままでは確実にな」

「……」

ベルは猪や勇者達でさえ『黒竜』を倒せないという事実にはショックを受けているようだ。

「ここでふと思う。

目の前にいるベルもかなりの実力者だ。少なくとも第一級冒険者の実力はあるとみて良いだろう。

しかも年はまだ15にも満たないくらいだ。

だから興味本意でベルに尋ねてみる。

「ベル、お前は今、レベルは幾つだ？」

「えっと、L v. 5です」

「年は？」

「14です」

「ランクアップの速度は？」

「速度？」

「言い方が悪かったな。今までランクアップするまでにどれくらいの時間を擁した？」

「えっと、恩恵授かってL v. 2になるまでに1ヶ月半」

「んっ？」

「次にL v. 3になるまでに1ヶ月」

「んんんっ？」

「L v. 4になるまでに2ヶ月」

「……」

「L v. 5になるまでに2ヶ月です」

「……」

アルフィアは普段閉じている瞼を開けて驚く。

ランクアップの速度が異常だ。

目の前の少年が嘘を言っているようには思えないから、本当のことなのだろう。

16歳の頃にはL v. 7に至っていた自分よりも圧倒的に速い速度でランクアップしている。

この異常さはなんだ。

このような人材、ゼウスとヘラの眷族にも………待て、まさか！妹の持っていた

白髪。あの憎い男の紅い瞳。そして年齢が14、つまりこの時代の妹の子と同年齢。そしてゼウスやヘラの眷族達を越える素質の持ち主。……………まさかこの少年は……………

アルフィアは意を決してある質問をする。

「……………ベル、お前の親はどんなヤツなんだ?」

「……………両親は居ません。でも祖父が居ました。そうですねー、お爺ちゃんは愉快な人でした。例えば……………」

語られるのは、思い出したくもないあの好々爺と悉く一致する特徴。

「へっ?」

アルフィアは気付いた時には目の前の少年を抱き締めていた。

ベルは突然のことに変な声を出して戸惑う。

しかしここで、アルフィアが涙も嗚咽も漏らしていないのに泣いているように、ベルは感じた。

だから自分の腕を彼女の背中に回し、抱擁を返す。

すると、

「ベル、私はお前の母親の姉だ」

「えっ?」

「私にはお前と会う資格は無かった。だがこうして立派になっているお前と出会えて、心の底から嬉しい」

そう言つて彼女はベルをさらに強く抱き締めた。

突然の告白に驚いていたベルは彼女から懐かしい香りを感じた。

そしてベルは、いつの間にか自分が泣いていることに気付く。

何故泣いているのかも理解出来ていないまま、ベルは彼女を抱き締め返した。

こうして、本来出会う筈が無かった2人が本当の意味で邂逅を果たした。

第4話 親子の会話

なでなで。

「……」

なでなで。

「……」

今、僕はまたアルフィアさんに膝枕をされている。

どうしてこうなったのかというと、それはお互いに抱き締め合った後に

「ベル、膝枕をさせろ」

とアルフィアさんが言ったからだ。

やんわりと断りたかったが、僕の中では既に『アルフィアさんの言うことに逆らつてはいけない』という暗黙のルールが出来ていたので、何も言わずにアルフィアさんの腿の上に自分の頭を乗せた。

アルフィアさんは僕のお母さんの姉らしい。つまりヘルメス様が言っていた、七年前にオラリオで大量虐殺をした一人でもあり、僕の唯一の肉親だ。

話したいことは沢山ある。なのでまず最初にアルフィアさんの呼び方について尋ね

ることにした。

「えつと……僕のお母さんのお姉さんなので……おばさ」

ドゴツツ!!

と言葉を言い切る前にベルの頭からヤバイ音があった。

「殴るぞっ」

「……もう殴ってますよ!!」

僕は目尻に涙を溜めて悶絶しながら言い返す。

そんな抗議を無視して、アルフィアさんは未だ膝枕した体勢のまま僕を見下ろして言う。

「私を呼ぶ時は『お義母さん』だ。分かったな?」

「はい。……お義母さん」

「それで良い」

気恥ずかしく思いながらも僕は『お義母さん』と言う。

アルフィアお義母さんも満足そうだ。気分が良くなったのか、また僕の頭を撫で始めた。

(良かった……機嫌が良くなったみたいで)

と安堵しているのも束の間、お義母さんは何かに気付いたのか、僕に尋ねてきた。

「ベル、お前、膝枕されるのがやけに様になっている気がするのだが、もしかしてよく誰かにしてもらっているのか？」

「うえっ!？」

お義母さんの唐突な、そして鋭い問いかけに僕は目に見えて動揺する。

「そ、そそそんなことないですよ!!」

「その反応は肯定と判断して良さそうだな」

「うっ、……はい」

僕は否定するが、逆にその反応で確信させてしまったらしい。僕はあきらめて白状する。

「何処の女だ？」

「へ？」

「相手は誰だと聞いている!」

「いや、それは!……どうしてそんなことを？」

お義母さんが不機嫌な様子で、僕に膝枕をしてくれる相手を聞いてくる。なので僕はその理由を聞いてみた。

「簡単だ。お前にふさわしいかどうかを私が判断する」

「なんで!？」

「変な女じゃないか確認しないと。お前は優しすぎるが故に女に騙されたこともあるだろう?」

「うっ!?!」

「凶星を突かれて僕は言葉を詰まらせる。リリのことだ。確かに最初はナイフを盗んだら、十階層でオークの群れに僕を襲わせたりしたけど、今はちゃんとした仲間だし。」

「その反応はやはり心当たりがあるんだな。私の魔法の餌食にしてくれる!」
「ちよつ、それは止めて!?!今はちゃんとした仲間だから!!」

お義母さんの恐ろしい発言に僕は反対する。

じゃないとリリが死んじゃう。

「まあ良い。膝枕の相手といい、聞きたいことは沢山ある。ベルも私に聞きたいことがあるんだろう?」

「はい」

「それなら、ベルがオラリオに来て冒険者になってから今に至るまでの話を聞かせろ」
「分かりました」

お義母さんの提案を受け入れ、僕は冒険者になってからこれまで自分がやってきたことを話した。

僕は話した。

アイズさんに一目惚れして、彼女の横に立てるように強くなろうと決めたこと。

アイズさんとの訓練の中で彼女に膝枕されるようになったこと。

レベル1の時にミノタウロスを倒してレベル2になったこと。

レベル2の時は「アポロン・ファミアリア」と戦争遊戯をして、最後にはレベル3のヒュ

アキンスさんを一対一で戦って倒し、レベル3になったこと。

レベル3の時は異端児のことで色々悩んだりしたけど、最後には偽善者になる覚悟を

決めたこと。

レベル1の時に倒したミノタウロスが生まれ変わってきて僕に再戦を求めてきたの

で戦ったけど、最後には負けてしまったこと。

レベル4の時は遠征の中でイレギュラーの中のイレギュラーのモンスターである

『ジャガーノート』と戦ったこと。

深層で4日間、装備などがほとんど無い状態で生き延び、最後には『ジャガーノート』

も倒すことが出来たこと。

「フレイヤ・ファミリア」の第一級冒険者達による、これまでにない洗礼を受けたこと。他にも色々と話した。

お義母さんは最後まで何も言わずに僕の話聞いてくれた。

「……そうか、ベルがオラリオに来て、後進達あいつらの洗礼も浴びて、強くなってくれているよ
うで何よりだ」

「ハハハ、僕オラリオに来て何度もボコボコにされてますからね」

「アポロン・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」は今すぐにでも潰しに行くか」

「この時代の彼らには何も罪は無いですからね！ 本当に潰しに行かないでくださいよ
！」

やはりというか、お義母さんは「アポロン・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」
に対して怒っているようだ。

「分かっている。私が七年後の時代に行けたらすぐにでもやるが、この時代の奴等は関
係無いからな」

「よ、良かった」

お義母さんも分かってくれているようで僕は安心する。

「ベルの話聞いて色々言いたいことはある。だが、ここで言った所で何も変わらんか

らな。今はお前がどんな『冒険』をしてきたのかを知れただけでも十分だ。ベルは私に何か聞きたいことがあるんだろう？ 今度は私が話す番だ。何でも聞いてみる？」

「えっと、お義母さん達がオラリオで沢山の人達を殺したとヘルメス様が言っていました。本当にそんなことをするんですか？」

僕は単刀直入にお義母さんに尋ねる。

「ああ、するぞ。」

「どうしてですか!?! オラリオの冒険者達に『洗礼』を与える為だと聞きました。でも、何故そんな『手段』を取るんですか!?!」

「時間が無いからだ」

「えっ?..」

「私達『最強の眷族』と呼ばれた者達は私とザルドを除いて皆死んだ。その上、『約束の刻』は結ばれた誓約を待たずして訪れる」

「『約束の刻』? ど、どういうことですか?..」

「もうダンジョンは限界だ??ということだ。つまりダンジョンの最下層を早く攻略しなければ、下界は滅ぶ。それを阻止するためには強引な手段あいつらだとしても猪たちあいつらに『洗礼』を与え、『超克』して強くなってもらわなければならぬ」

「.....」

お義母さんの言葉に僕は何も言えなくなつた。

ダンジョンが限界だという意味はなんとなく理解出来た。僕のいた時代でも「最近ダンジョンは異常な点が多い」と神様達が言っていたからだ。恐らく何かが起こる前兆なのかもしれない。そしてそれを回避するためにダンジョンの攻略が必要だということだろう。

「ベル、お前はこの話を聞いてどうしたいと思つた？」

「えっ？」

「ダンジョンの攻略、そして黒竜の討伐。この二つは時間の問題だ。勇者や猪達のように長い時間をかけてランクアップしているようでは遅い。その間に下界は滅ぶぞ」

「僕は……」

「私は七年後の未来の話聞いて失望した。猪達が私達の洗礼の後にランクアップを一度もしていなかったからだ。私達が命を賭けてあいつらの壁になつたとしても、結局下界は滅ぶのだろうと思つた。しかし、同時に希望も得た」

「希望？」

「お前だ、ベル。」

「僕？」

「そうだ、お前は短期間に何度も壁にぶつかり、その度に己を賭して『冒険』をし、強く

なった。『憧憬^ス一途^ル』の恩恵も大きいだろうがな。お前は下界を救える可能性を持つている」

「僕が下界を？」

「ああ、黒竜を倒し、そしてダンジョンの最下層の攻略もやれるだろう」

僕が下界を救う？ 黒竜を倒す？

「無理ですよ！ アイズさん達ならともかく僕なんて！」

そんなの想像出来ない。だから僕は無理だと言った。

「……………そうか、ベルの考えはそうなんだな。ならば仕方がない」

「えっ？ どうしたんですか、いきなり」

僕の返答を聞いてお義母さんの纏う雰囲気が一気に剣呑なものに変わる。

「表に出ろ、ベル」

「え？」

「早くしろ！」

「は、はいはい！」

こうして僕とお義母さんは教会を出た。

第5話 【福音（ゴスペル）】

僕とお義母さんは教会を出て少し歩いた場所にいた。

周りに建物が見えるが、その中で誰かが暮らしているわけではなさそうだ。全て廃墟になっている。

今歩いている場所もだけど、あの教会周辺は人が誰も住んでいないのはこの時代も同じらしい。

そんなことを考えながら歩いていると、僕の前を歩いていたお義母さんが立ち止まった。

「あのお、ここに何しにきたんですか？」

「お前と別れるためだ、ベル」

「えっ？」

「そのままの意味だ。私はここでお前と別れ、イヴイルス闇派閥の拠点に戻る」

僕の疑問にお義母さんは淡々と答える。

「ど、どうして!？」

「冒険者達に『洗礼』を与えるためだ。ベル、お前は黒竜を倒すのは無理だと言ったな？」

あのモンスターを倒せる『可能性』を持つお前が黒竜を倒すことを拒んだんだ。ならば他の奴がああ『怪物』を倒せるように、私はそいつらの『壁』にならねばなるまい」

「……」

お義母さんの言葉に僕は言い返せない。

僕の発言が原因でこのような結果になったからだ。

お義母さんは僕に背を向け歩いていく。

このままでは僕の居た時代と同じ様に彼女を『大罪人』にしてしまう。

そんなの、嫌だ！

そんな『未来』を知っているのに、みすみす行かせるのは嫌だ！

何より、『持病』で死期が迫っているとはいえ、彼女の寿命を縮めて早死にさせたくな

い！

ギリギリまでちゃんと生きてほしい！

両親が居ないこの時代の僕と最期まで一緒に暮らしてほしい！

そんな想いを糧に僕は足を前へ踏み出し、お義母さんを止めようとする。

「待ってください！」

「そういえば、ここまでわざわざ出てきてお前に別れを告げた理由を言っていなかったな」

「へ？」

「それは、引き留めようとするであろうお前を叩き潰す際に妹の愛した教会まで破壊してしまわないためだ——」
【福音】^{ゴスペル}。

「ツツ!!」

最後に彼女が発した『詠唱』を耳にした瞬間、僕は自身が立っている位置から急いで飛び退いた。

理由は無い。ただ感覚的に、ここ居てはまずい、と思ったからだ。

結果、その判断は正しかった。

証拠に僕がさつきまで立っていた場所は、いや、そこを含むお義母さんの周りは地面が抉れている。

もしあのまま立っていたら、僕は魔法を受けていただろう。

僕が冒険者生活で身に付けた危機察知能力は伊達ではなかったようだ。

しかし気になることがある。

（魔法の行使速度が僕とほぼ同じ!）

やりにくい……。

実際に速攻魔法を受ける側に立ち、身を持って自身の魔法の厄介さを実感する。

その上彼女の魔法は不可視だ。

僕の魔法は速度重視なので、ベクトルは違えど厄介さという点ではここでも一緒だ。

こんな状況でなければ喜べたんだろうけど。少し複雑な気分だ。「驚いたな。私の魔法を初見で避けられる奴はそうそう居ないぞ」

「……嫌な予感がしたので何となくで避けただけです。別に凄くはありません。運が良かっただけで」

お義母さんは驚いているようだが、僕は謙遜して答える。

実際にあんなの毎回やられたら避けられるわけがない。

「そんなに自分を卑下しなくても良いだろうに。十分凄いぞ。しかし、これなら少しは楽しめそうだな。少しギアを上げるぞ……フツ！」

「——っ!!」

お義母さんが高速で近づき手刀を放ってくる。

僕は何とか避け、そして反撃しようと今唯一装備している《神様のナイフ》を腰から抜こうとして止まった。

お義母さん、肉親に刃を向けるのをためらったからだ。

「甘いな、お前は」

「——ぐほおー！」

お義母さんは当然そんな僕を待つわけがなく、腹に蹴りを入れてきた。

「お前の考えていることは手に取るように分かるぞ、ベル。大方、肉親わたしには刃を向けられ

ない、とても思っているのだろうか？それが私に対する一番の侮辱だとも知らずに」
「つつ!？」

「お前は未だに自分の気持ちにすら気付いていないようだな。何故お前がこの時代に来たのか、考えてみる」

「……何を、言つて？」

「私はこれ以上何も言わん。自分で考えろ。それと軟弱なお前にはもう手加減はしない。」

「ツ!!」

そう言った瞬間、彼女から僕の方に『風』が流れてくる。

そして同時に彼女の周りの『魔力』が増幅した。

今までの魔法は本気ではなかったのか……!？」

「一つ忠告しておく。……死ぬなよ?」

「まずい!!」

「遅い。【福音】」

ゴスペル

——【サタナス・ヴェーリオン】

「ぐううううううう!？」

回避が遅れたベルはアルフィアの本気の魔法をもろに食らった。

今ベルはまともな装備をしていない。この時代に転送された装備は教会の地下室に

置いてきたからだ。ゆえに普段街中を歩く際に着る服しか身に付けていない。唯一《ヘスティア・ナイフ》があるが、これではアルフィアの魔法は防げない。

よつて、魔法の攻撃が止んだ時にはベルはボロボロになっていた。

服は破れ、頬、肩、脇腹などの様々な箇所には酷い裂傷が出来ていた。

しかし、それだけだった。

普通は対アルフィアの魔法専用の魔道具や防護の魔法無しの生身でアルフィアの魔法をもろに食らうとLv. 5でも重傷どころではすまない。最悪死ぬ。

しかし、ベルはその場で倒れるわけでもなく、踏みとどまっていた。それだけではなく、これくらいの傷は全く問題ないとばかりにアルフィアの方へと足を進めている。

これはベルのLvに不相応な尋常ではない『耐久』^{アベリリテイ}の能力値の恩恵でもあるが、少し違う。今のベルの傷を負えば、普通は誰でもその場で倒れ戦闘不能に陥る。「ロキ・ファミリア」のガレスでさえ例には漏れず、そうなるだろう。

だが、ベルはこれまでこれくらいの重傷を負いながらも何度も格上相手に挑み、その上打破している。

その経験がベルに膝をつくことを決して許さない。

他ならないベル自身もこれくらいで倒れることを許さない。

「……お前は私をどこまで驚かせる。Lv. 5でありながらどこまで耐えるとはな。も

う立つことすら難しいだろうに」

「はは、これくらいは傷、僕にとつては大したことないですよ」

アルフィアも今まで以上に驚嘆している。

そんな彼女にベルが自慢気に答えた時だった。

「——あー、俺も流石に驚いたぜ。まさかアルフィアの本気の魔法を浴びて、Lv.5でありながらここまで耐えるとはな」

と、目元に傷を負った全身鎧の大男がベルに向かって楽しそうに声をかけてきたのは。

第6話 強制戦闘

僕の背後に彼は立っていた。

漆黒の全身鎧を着るいわおる敵のような巨軀きよく。二Mメドルを越える身の丈。朱殷色しゅあんの短髪に同

色のマント。

周りに傷跡が残っている灰色の双眼が、僕の顔を真っ直ぐ見据えている。

いきなり自分に話しかけてきたこの人物に僕は動揺を隠せない。

いつからここにいた？

さつきまでここら一帯には僕とお義母さんしか居なかつた筈だ。

第一級冒険者になつた自分に認識出来ないように接近していた人物に、ベルは戦慄する。

「……それで、L.V. 5ということは美神フレイヤの猪の後進か？道化の眷族のL.V. 5は俺の知っている連中しか居ないと聞いているからな」

「……ち、違います」

混乱が抜けきれない僕に彼は尋ねてくる。

しかし自分は「フレイヤ・ファミリア」ではないので、当然僕は彼の問いかけに対し

て否定する。

「そうなのか？ 闇派閥あいつらから聞いたオラリオの戦力の中に、あの2つの派閥以外にL.V. 5は居なかった筈だが」

「……」

「……まあ良い。そんなことよりお前は見所がありそうだな。ゼウス俺とヘラちが居ない間に良い後進が育つ……この『匂かおりい』………何故だ？ 何故お前から『あの馬鹿』とアルフィア……いや『アルフィアの妹』の『状態あじ』がする？……まさか!？」

「『悪食』を極めたせいで『五感』が敏感になっているお前ならすぐに気付いたようだな、ザルド」

『何か』に気付いた様子の彼に、今まで口を閉じていたお義母さんが言う。

「……アルフィア。だが、あいつらの『子供』はまだ七歳くらいの筈だぞ」

「その『子供』が七年後の未来からやって来た、ということだ。私も最初は耳を疑ったが、本当にそうらしい」

「確かに信じられないことだが、お前が言うのならそうなんだろうな。……それはそうと、俺はさつき来たばかりで知らんが、何故戦っていたんだ？」

状況を把握した彼が尤もな質問をお義母さんにする。

「あまりにも『軟弱』な考えをしていたからな。『洗礼』を与えていた、それだけだ」

「……そうか。それは確かに許容出来んな。最強俺の派閥たちの間に生まれたのならば尚更な」

「丁度良い。ザルド、お前がベルに『洗礼』を与えてやれ。お前も満更ではないだろう?」
「はははははははははは、まあな。俺も『あの馬鹿』の息子に会いたいと思っていたし、出来ることなら強くするために『洗礼』を与えたいとも思っていたからな、良い機会だ。……ベル、だったか?」

「は、はい!」

「そういうことだ。俺と戦やい合りうぞ」

そう言つて目の前の武人は、肩に担いでいた自身の身の丈程もある大剣の切っ先を僕に向けてきた。

「くっ!」

いきなりの展開にベルは動けない。

さつきのお義母さんとこの人の会話から、彼はお義母さんと同じくオラリオに混沌をもたらすためにやってきた最強の眷族の一人、『暴喰』。

つまりこの人も僕の家族も同然の人だ。

どうして、どうしてせつかく会えたのに彼等と戦わないといけないんだ!?

両親が居なかった故に家族を大切にしたいと人一倍思っているベルは、目の前の武人かぞ

と戦うことを拒絶してしまう。

「……はあ。アルフィアがお前に怒っている理由が少し分かったぞ。まあそちらから来ないのならば俺から行くだけだ」

「ツツ!!」

ザルドはそう言つてベルに攻撃を仕掛ける。

ベルに一瞬で近づき放たれる、大剣での剛撃。

ベルは反射的に腰から《ヘステイア・ナイフ》を抜き大剣の腹を叩くことでその攻撃を凌いだ。

「~~~~~!!?」

骨の髄まで響いてくる程の痛撃。

(本気だ！今のを防がなかったら僕は死んでいた!?)

本気で殺しにきた目の前の武人にベルは戦慄する。

「ほう、防いだか。だが、今ので驚くようではまだまだだぞ」

そう言つて再びザルドは剛撃を放ってくる。

甚だしい威力と速度。そしてナイフでは到底受け流しきれない程の破壊力。

剣撃^{けんげき}を交わすことたった五合、それだけでベルの体勢が崩れた。

「温い」

「ぐはあっ!？」

その隙を逃すことなく繰り出される回し蹴り。

脇腹を強打されだベルの体は風を切る矢と化し、近くにある廃墟を貫通、それを何度も繰り返しながら飛ばされた。

「がつ、ぐう……!？」

何度も壁にぶつかることでようやく止まれたベルは、全身を焼く痛みに呻く。

そもそもベルはアルフィアの魔法によって体をぼろぼろにされていたのだ。それに加えて今の一撃。ベルの体は限界に近づいていた。

ベルはふらつく体を押して立ち上がる。

「その程度か?」

「!」

いつの間にか背後に回っていたザルドの言葉に、はっとしてベルは顔を振り返った。

「ぬん!」

「ぐっ!？」

直後、ザルドが大剣を振り下ろす。

ベルはナイフで受け止めるが、その反動で後方に飛ばされる。

(ナイフじゃ駄目だ!せめて同じ大剣じゃないと!?)

ベルは自分の今の武器では圧倒的に不利だと実感する。

しかし大剣はここには無い。教会の地下室に置いてきたからだ。

そして、このまま受け身になっては本当に死ぬ。

「ちくしょう!!」

これらの状況から、ベルは強制的に戦闘を強いられることになった。